論　文

中華人民共和国天津市の就学前教育
－华夏未来幼儿教育集团の幼稚園教育における音楽指導を中心に－

中华人民共和国天津市的学前教育
－华夏未来幼少儿教育集团的幼儿园教育的音乐指导做为中心－

山中　　文（高知大学教育学部音楽科教育研究室）
遠藤　隆俊（高知大学教育学部社会科教育歴史学研究室）

山中　文　远藤隆俊

高知大学教育院音乐科教育研究　高知大学教育院社会课教育历史学研究

概要

笔者们在 2008 年 9 月参观学习了由天津师范大学推荐的中华人民共和国天津市河西区幼儿教育设施「华夏未来双语幼儿园」，同时还与设施的领导们就关于就学前的教育进行了磋商。学习参观的「华夏未来双语幼儿园」是天津市最大的幼儿教育设施。是由「中国·天津华夏未来幼儿教育集团」（Cathay Future Education Group）经营，是以天津市富裕阶层的孩子为对象实行的最先进的教育，配备着保育所，幼儿园，小学校功能基础上增加了父母与子女中心，艺术，英语等专业班级。

本稿，抓住这种集团式的幼儿教育为现在中国大城市的就学前教育的代表性尖子教育之一，在介绍幼儿教育设施的同时，把参观幼儿园班级时的情况和被提供的指导文献作为基础，特别讨论了幼儿园班级音乐教育的教育理念和方法。其结果，清楚地认识了设施中完善的设备以及具有强有力的领导能力，把早期开发作为目标的同也把研究灵活多变的指导方法作为目标的事情。

序

筆者らは、2008年９月24－27日の日程で高知大学と国際交流協定を結んでいる天津師範大学（中華人民共和国）を訪問した。そして、９月26日、天津師範大学が推薦する中華人民共和国天津市河西区の幼児教育施設「华夏未来双语幼儿园」を見学・参観するとともに、施設指導者らと就学前教育について協議を行った。

天津市は、周知の通り中国北部の中央直轄市であり、1000万人を超す大都市である。見学・参観した华夏未来双语幼儿园は、その天津市で一番大きな幼児教育施設である。「中国・天津华夏未来幼儿教育集团」（Cathay Future Preschool Education Group）が経営しており、保育所、幼稚園、小学校に加え、親子センター、芸術、英語などの専門クラスを配備している。訪問した天津師範大学が推薦し、参観・撮影を許可した施設であるが、天津市の富裕層の子どもたちを対象とした先進的な教育を行っていることから推奨されていると考えてよいだろう。筆者らは、この施設の親子センターと幼稚園クラスを主に参観し、協議した。

本稿では、このグループの幼児教育を現在の中華人民共和国（以下、中国と略記）の大都市の就学前の代表的なエリート教育のひとつとしてとらえ、同幼児教育施設を紹介するとともに、幼稚園クラス参観時の様子や提供された指導文献を元に、特に幼稚園クラスの音楽教育の教育理念と方法を検討する。

１　「华夏未来双语幼儿园」概要

⑴　施設・教育環境概要

参観した华夏未来双语幼儿园は、先にも述べたとおり「中国・天津华夏未来幼儿教育集团」（Cathay Future Preschool Education Group）が創設している幼児教育施設のひとつである。「中国・天津华夏未来幼儿教育集团」は、天津市内に华夏未来双语幼儿园を含めて12の幼稚園を経営しているが、中でもこの华夏未来双语幼儿园は、このグループの本部ビルに併設された大型幼児教育施設となっている。施設の敷地面積はおよそ４万㎡であり、広大な敷地の中に、教室やホール、プール、畑、屋外運動場、池や森の中に遊具を配置した公園、メリーゴーランド等を兼ね備えている。

写真１（华夏未来双语幼儿园　全景）

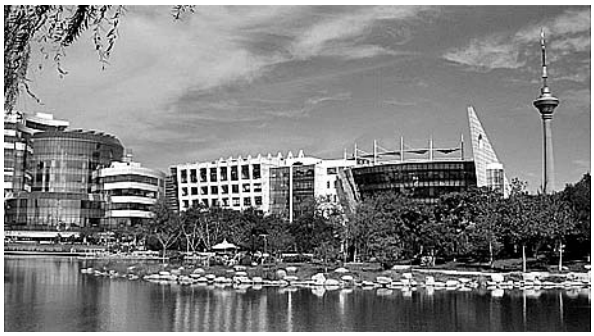


写真２（华夏未来双语幼儿园　屋内）

写真３（华夏未来双语幼儿园　併設の公園）

写真４（华夏未来双语幼儿园　公園内メリーゴーランド）

通園児童は総勢600名、指導者は、園長、教学担当者、事務、農作業担当者、給食担当者などをあわせて82名である。保育所・幼稚園・小学校と毎日通う施設以外に、外部からの学習者用に、１歳～６歳半までの子どもと親が一緒に週一回通う親子センターや、芸術、英語などの専門クラスがある。

施設設備、スタッフ、教育を充実させているだけに、授業料も高額であり、１月の授業料は2000元（３歳以下は2300元）である。これは、この施設の教学担当者の１ヶ月の給与に相当し、非常に高額であることがわかる[1]。

⑵　幼稚園クラスの教育環境

中華人民共和国では、３歳児までが保育所、３歳児以上が幼稚園というように管轄が分かれている。この华夏未来双语幼儿园でも、３歳児までの保育所クラスが８クラスあり、３－６歳までが幼稚園クラスである。幼稚園クラスは、小班（年少クラス）が６、中班（年中クラス）が６、大班（年長クラス）が４の計16クラスで構成されている。

幼稚園クラスに入る際には、面接試験と身体検査が行われ、他の子どもに危害を加えないことなどが考慮されているという。つまり、富裕層の子どもであること、知的能力に問題がなく、特別な支援を必要とする子どもではない、ということ等が入園の条件として考えられているということができる。

各クラスの部屋は、明るく、高価なブロックやままごと道具などの玩具も取り揃えられており、指導用のパソコン、テレビ等も設置されている。隣接しているトイレも明るく清潔である。各部屋を出ると広いロビーにつながり、そこにもイタリア製の乗り物玩具などが数台置かれている。また、お誕生会用には別にホールが用意されており、催しを行う演台を囲んで、幼児がゆったりと座れるソファが配置されている。

写真５　华夏未来双语幼儿园　幼稚園クラス室内

写真６　幼稚園クラス室内のブロック・積み木コーナー

写真７　幼稚園クラス室内　ピアノ、英語教育用の張り物

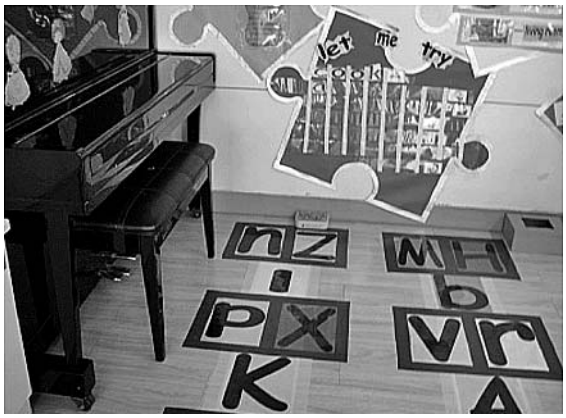
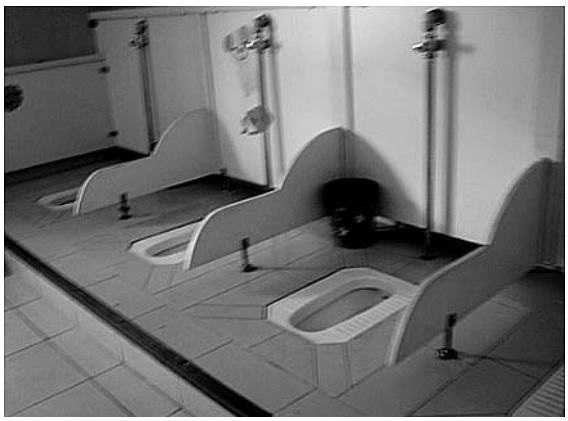


写真８　幼稚園クラス室内　教材提示用テレビ

写真９　トイレ



通園している子どもたちは、この施設で、平日の７時30分から17時まで過ごす。朝、昼、夕食の３食が用意され、おやつも午前、午後と２回出される。また、12時から２時半までは午睡時間となっており、午睡用の部屋が別に設けられている。保護者送迎用の出入り口付近には、迎えに来る保護者に様子を伝えるための伝言板が張り出され、食べた食事の量からその日の様子が事細かく伝えられるようになっている。

写真10　午睡用ベッドのある部屋

写真11　送迎の保護者用伝言板

中国・天津华夏未来幼儿教育集团は、後述するように、2001年公布された「幼稚園教育指導綱要」による領域を踏まえた幼稚園教育を行っており、それはこの华夏未来双语幼儿园の幼稚園クラスも同様である。しかし、それだけではなく、週に１度のプールの他、週に２種類の専門クラスの勉強があり、それぞれ専門家の指導を受けることになっている。たとえば、芸術の専門クラスでは、年中の子どもたちは、音楽、美術、京劇などに分かれて指導を受ける。さらに、その中の音楽であれば、ピアノ、電子オルガン、二胡、ギター、ドラム、歌など各種の演奏の指導が用意されている。

2　中国・天津华夏未来幼儿教育集团の幼稚園における音楽教育理念

⑴　中国・天津华夏未来幼儿教育集团の教育理念

中国・天津华夏未来幼儿教育集团では、教育課程の紹介文として、次のような理念が示されている[2]。

Targeting at shaping perfect characters; Combining various teaching elements and resources, developing positive feelings; Giving prominence to individual, experiencing excellent international cultures; Building a firm ground for the life-long development of children

これらから、中国・天津华夏未来幼儿教育集团の幼稚園教育課程が、人格形成を目標としながら、国際教育を含めて様々な教育要素と教育資源を組み合わせた学習環境をつくり、個々の子どもの発達の基盤とするものをめざそうとしているものであることがわかる。

中国では、1979年からはじまった一人っ子政策や近年のめざましい経済発展に伴い、親による就学前教育への投資や関心も増大した。それに伴い、就学前教育が中国の政策上も重要課題となり、大幅なカリキュラム改訂がなされてきた。唐澤ら[3]は、1989年当時、言語や知的能力を集団教育として培うことに重点が置かれていた中国の幼児教育が、近年になって個を大切にする教育へ変化しようとしているという。実際、1989年試行、1996年改訂の「幼稚園工作規定」においても、子どもの発達段階にふさわしい遊びや一人ひとりの発達が言及されるようになった。2001年公布の「幼稚園教育指導綱要」においても、遊ぶことを活動の基本とし、楽しい幼年生活を通して心身の発達に有益な経験を積ませ、個々の子どもの個性豊かな発達を促進させていくという姿勢がみられる。ただし、個を大切にした遊びのねらいは、日本のように社会性や他者理解ではなく、あくまで早期才能開発であると考えられる。綱要にも、各種の教育や教育資源を組み合わせて利用することによって、教育環境を整え、保育と教育をともに重視していくことがうたわれている。

中国・天津华夏未来幼儿教育集团が掲げている幼稚園の教育理念は、まさにこのような教育的背景や綱要を下敷きにしたものであるといえよう。就学前教育への保護者らの熱意のもと、大都市の有名園として、遊びを中心としながらもバイリンガル教育をはじめとした専門クラスを設置し、早期才能開発をめざした知育をめざすという方向性が窺える。

⑵　中国・天津华夏未来幼儿教育集团の音楽教育理念

中国・天津华夏未来幼儿教育集团の教育は、『全域性教育园本课程理念与操作』（主編　马丽莉、新蕾出版社、2006年）に基づいている。同書には、前掲「幼稚園教育指導綱要」に示されている５領域、つまり「健康領域課程」「言葉領域課程」「社会領域課程」「科学領域課程」「芸術領域課程」に沿ってその教育理念や活動が示されている。

そのうち、「芸術領域課程」は、さらに「美術課程」と「音楽課程」に分けて説明がなされている。この節では、この「音楽課程」について翻訳し、その内容を分析する。なお、翻訳部分についてはゴシック体で示しており、文中の下線および丸数字は、引用者が付した。

音楽課程に対する理解[4]

１．音楽教育が人類の文化伝承に対して持つ意義と作用

音楽は人の精神の産物であり、精神の領域を表現し、またこれを探るための一種の手段であり、工具である。音楽活動は人類のもっとも自然で原始的な行為である。人々は物に感じ、心を動かされると、自然に歌い踊り、叫び、通常とは異なる行動をとるなど、感情を発露し、刺激を求め、ようやく心身の平衡にいたる。

人類の発展過程において、王朝の歴史か社会の発展かを問わず、みな音楽の注釈や解読が密接にかかわっている。音楽は一種の表現するための方法として、自己を発揮する最大の作用と影響がある。（①）

２．音楽教育が現代社会の発展に対して持つ意義と作用

幼児教育はすべての国民教育の基礎中の基礎であり、全国民の素質を高める基本過程である。幼児を教育し調和の取れた社会を発展させることは、新たな時代の幼稚園教育の大きな目標であり、芸術領域中の一部分として、音楽という芸術教育は「全域的教育」の重要な一環である。これは美の形象と人を愉快にさせる方式を通して、幼児の情操を知らず知らずのうちに幼児を陶冶し、幼児の情感世界を豊富にし、想像力と創造性を発展させ、幼児に美の教育を受けさせる役割を持つ。（②）音楽教育のこの独特の機能は、その他の教育では代わりえないものである。

音楽は情感を最も有する芸術であり、情感を最も発することのできる芸術である。さらに直接に、有力に人の感情世界に入りこむことができる。幼児期は人生の基礎の時期であり、情感が迅速に発展する時期である。音楽は、美育が幼児の個性の全面的な発展を正確に実施するために重要な意義を持つ。音楽の素質と能力は一人の人間が音楽芸術で発展させ得る重要条件であり、また音楽教育の中の核心的な問題である。音楽教育の中で幼児の

音楽的な美の感知、鑑賞、理解および表現の創造能力を養成することは、幼児の音楽的な素質を高めることである。（③）これは音楽という芸術教育を達成するために必要な手段であり、また審美教育を達成するための目的でもある。これにより、幼児は学習過程において相応の感情体験を獲得し、また音楽の情緒に対して共鳴する能力が養われる。（④）

3．音楽教育が児童の心身発展に対してもつ意義と作用

音楽を愛することはそれぞれの子供の天性である。子どもたちは音楽を聞くとそれに集中し、音楽に対して感情をあらわにし、身体的な作用を頻繁にあらわす。小さな乳児でもオルゴールやいろいろな楽器の音声に耳を傾け、二歳前後になると次第に音楽に反応して集まり、自分で歌ったり踊ったりする。幼児の全期間を通して、子供たちは音楽を感受し音楽を理解する能力を不断に発展させている。

音楽はリズムと旋律を最も基本要素として構成される組み合わせであり、人類が生活の中から創造した美の芸術である。それは、心を黙化し美化する作用がある。児童は好奇心と探求心を持ってこの世界に至り、不断に彩りを探し出す。すなわち子どもたちは環境の中で、豊富で変幻自在な音響や優美な楽曲に耳を傾け、自分たちの感情を満足させる。南スラブの音楽学校では、多年の実験を経て次のことを発見した。すなわち、良い音楽の啓蒙を受けた幼児は、成年になってもなお強い好奇心を保持し、創造的な生活に情熱を傾け、生活の中でも困難を克服でき、失敗を恐れない。ここからわかることは、音楽は直接的に児童の行動を刺激する。児童の知識、情感、意志の発展に大変に重要な意義を持つ。（⑤）

音楽教育は音楽芸術の特徴を発揮し、特殊な思惟方式を運用している。旋律、リズム、強弱、音色、楽曲形式など音楽を構成する要素が有機的に結合し、美しい感情を、音声を使って表現する。そこから聴衆に共鳴と美感を与え、表現者の音楽情感と聴衆の音楽情感が一体となって融合する。（⑥）これは音楽教育の手段の中で、情感の要素が作用した結果である。音楽は子供の心の琴線を発動する。子どもは音楽美を感受すると、強烈な感情体験を生む。そうして客観世界を認識し、良好な道徳情操と健康美好の心理を形成し、幼児の心身に全面的な発展を促す。

我が国（中国）で頒布された「幼稚園教育指導綱要」の中で、芸術領域の目標と価値に対しては、明確な規定がある。

芸術領域の目標：

1、初歩的に感受し、環境、生活芸術中の美を好きになることができる

2、喜んで芸術活動に参加し大胆に自己の情感と体験を表現できる

3、自分の好きな方法で芸術の表現活動ができる

「幼児教育指導綱要」中の芸術領域の三つの目標は、幼稚園が幼児に対して音楽教育を進めるための指導要綱である。とくにこの「綱要」では、幼児の芸術活動能力が「大胆に表現する」過程で発展することを強調している。これにより、教師は幼児に自由表現の機会を与え、幼児にいろいろな芸術形式で大胆に自己の情感や理解と想像を表現できるように勧めなければならない。（⑦）また、教師は幼児を導いて周囲の環境と生活中にある美好な人、物、事に触れさせ、その感性と経験、審美情趣を豊富にし、子供の表現美と創造美の情趣を発揮させるべきである。音楽芸術活動中で、教師は幼児が各種の芸術活動に積極的に参加し、大胆に表現するのを激励するとともに、幼児が表現の技能能力を高めるのを助け、単一、平板な芸術訓練になるのを避ける。（⑧）

4．音楽課程とその他の課程の関係と区別

音楽教育は幼児の発展に対して重要な影響と作用を持つ。教師としては「幼児の美感を早くから発揮させ、音楽の真の意味を感受させる」ことを音楽教育の主旨とすべきである。同時に、幼児に音楽を教える過程では、幼児に音楽を認識させるばかりでなく、幼児に身体、言語、知識、情感、個性、社会性などを獲得させる。

私たちは、音楽教育が芸術領域の有用な構成要素であり、これが一種の審美教育で、智恵を開き、情操を陶冶し、幼児の心身が全面的に発展するのに重要な作用があることを認識すべきである。（⑨）同時に、児童の生活は音楽と離れることができず、良い音楽と児童の心とは相通じることを知るべきである。（⑩）表現力や創造力によって幼児は音楽に興味を示し、これによって幼児は音楽の実践中に本当に音楽を自分のものにできる。いろいろな方式によって幼児に音楽の美を感受し、また表現させることができる。そうして始めて、幼児の審美能力を次第に発展させ、幼児の芸術素養を引き上げることができる。

⑴　音楽領域と健康領域の関係

音楽は一種の表現形式として、他の各領域の活動の中に浸透している。健康領域も例外ではない。身体訓練の活動中に、音楽は背景として必要不可欠のものである。子どもたちは勇ましい行進曲の中では協調行進と隊列の変化を学ぶ。活発明快な楽曲では自由自在に先生と一緒に行動し、踊る表現を学ぶ。（⑪）また健康領域中の保健常識、安全、自我保護の方面でも、また歌曲や音楽遊技をしっかり教えることを通して、子どもたちに愉快な雰囲気の中で学習し、平板な説教におわるのを避ける。

(⑫)

⑵　音楽領域と科学領域との関係

音楽は一種の刺激方法として、幼児の抽象的思考の発展に重要な作用がある。(⑬) 優美な音楽は人の美的幻想と美的追求を生み、音楽中のいろいろな音の高さや速さによって大脳機能が協調的に発展するのを促進する。幼児は美を感受すると、右脳や全脳が刺激され開発される。

⑶　音楽領域と社会領域との関係

音楽は一種の積極的方法として、社会領域にも一定の作用を持つ。豊富で多様な芸術の表現形式から、形象と理解しやすい作品内容に至るまで、音楽活動はみな幼児に理解と受け入れの場を提供する。個性、交流、情緒、情感など社会的方面の教育目的は、みな音楽のこのような表現形式を借りて展開してきた。(⑭)

⑷　音楽教育と語言教育の関係

同様に、児童の表現形式としての言語は、音楽とともに幼児の表現空間を支えている。幼児は自分が音楽で良い体験をすると、言葉や身体言語を使って表現し、交流するので、言語表現能力の発展を促進する。(⑮) この二つの領域は相互に成長し、促進し、相互に方法となり、条件となり、補完となり、背景となり、相互に発展の仲介をする。

考察

これまでに訳した「音楽課程」の１～４までの内容のうち、１については、下線部①にあるように音楽が一種の表現の方法であるという見解が述べられているが、このような見解は、我が国の『幼稚園教育要領』の「表現」領域にも同様に示されている。『幼稚園教育要領解説』（文部科学省　平成20年７月）には、次のようにある。「幼児は、感じたり、考えたりしたことをそのまま率直に表現することが多い。また、幼児は、感じたり、考えたりしたことを身振りや動作、顔の表情や声など自分の身体そのものの動きに託したり、音や色、形などを仲立ちにしたりするなどして、自分なりの方法で表現している。」[5] 日本は幼児について、中国は幼児に限らず人全般について語っているという違いはあるが、いずれにしても、人の心的領域における表現方法の一つであるということを押さえている。

異なるのは、それ以降の２～４である。

先の「音楽課程」の２には、下線部②～④に見られるように、音楽教育は幼児を陶冶し、情感世界を豊富にし、想像力と創造性を発展させるものであるから、そのために音楽教育として音楽的な素質と能力を養成することが必要である、という見解が述べられている。つまり、音楽を通じた感情体験に言及しながらも、そのためには音楽的な資質を養成することが必要だということが示されているわけである。対して、わが国では、音楽的素養を身につけさせることには必ずしも主眼が置かれていない。『幼児教育要領解説』には、「大切なのは、正しい音程で歌うことや楽器を上手に演奏することではなく、幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうこと」[6] であり、「幼児期において、音楽にかかわる活動を十分に経験することが将来の音楽を楽しむ生活につながっていく」[7] とある。楽しく経験することによって、将来音楽を愛好する生活につながっていくだろう、という見通しが示されるにとどまっている。

「音楽課程」の３では、さらに、音楽の思惟方式について、「旋律、リズム、強弱、音色、楽曲形式など音楽を構成する要素が有機的に結合し、美しい感情を、音声を使って表現する」（⑥）と詳細に説明している。そして、下線部⑤や⑦、⑧にあるように、教師の役割として、情感や理解や想像を表現するために、いろいろな芸術形式を用いさせ、平板な芸術訓練にならないように表現技術能力の向上を援助することがあげられている。つまり、音楽の様式理解や表現技術の向上が、情感や理解や想像を表現するための要件であるということを明言しているのである。

これらは音楽をとらえる上では当然の理解であるが、わが国の『幼児教育要領解説』では、このあたりの記述がきわめて曖昧である。たとえば、表現技能に関する記述には、次のようなものがある。「教師と一緒に美しい音楽を聴いたり、友達と共に歌ったり、簡単な楽器を演奏したりすることも、幼児の様々な音楽にかかわる活動を豊かにしていくものである。このような活動を通して、幼児は想像を巡らし、感じたことを表現し合い、表現を工夫してつくり上げる楽しさを味わうことができるようになる。」[8] この記述では、音楽を聴いたり、表現したりする際に幼児がどのような音楽様式を知覚していくのかという点については不明である。したがって、後段の記述にあるように、表現しあったり工夫したりする際も、音楽様式の何がそれにかかわっていくのか明らかではない。共に表現しあう楽しさに主眼が置かれ、音楽の様式理解や表現技術については記述を避けている様子が窺える。

ところで、我が国においては、小学校・中学校学習指導要領（平成20年告示）において、音楽科にはじめて、〔共通事項〕が設置された。これは、音楽の要素や仕組みの学習に関する事項である。そして、『小学校学習指導要領解説』において「この（＝楽曲の、引用者注）曲想を生み出しているのは、音楽を特徴付けている要素や音楽の仕組みのかかわりによってつくられる「楽曲の構造」である」と示され、歌唱や器楽、鑑賞の活動を通し

て音楽の要素や仕組み、音楽用語を学び、それらを相互の活動に生かすこと、と解説されるようになった[9]。これまで愛好する心情や感性を主眼に置いていた音楽科において、ようやく音楽が醸し出す情感と要素や仕組み等楽曲構造とのつながりを認めた表記となっている。

つまり、中国においては幼稚園教育ですでに語られる楽曲構造は、我が国では就学後になって学習される状況であるといえよう。中国では、先述したような社会状況や教育背景から、音楽教育においても早期開発を意識した結果、音楽理解や表現技能向上を謳っているのかもしれない。しかし、知的・技術的能力の育成だけでなく、それらが情感を作り出すことに言及しており、情感を作り出しているものは何かという観点から音楽教育のねらいを合理的に導きだしていると窺うことができる。

最後の４では、幼児の心身の全面発達において、音楽が影響していることを述べている。そして、健康、科学、社会、言語領域との関連について触れている（⑨～⑭）。我が国でも、音楽は、美術や身体表現等の内容とともに「表現」という一領域をなしており、表現全体の中で他と総合的にかかわる、という見方が強い。また活動の中で、コミュニケーションを中心とした活動などでも多く音楽活動が用いられている。ただ、この「音楽課程」の場合は、たとえば健康において、保健常識や安全などを音楽を通じて教えること、というように、音楽を手段化させる傾向が強い。これは後述する活動においてより明らかである。また、抽象的思考に作用がある（⑬）等、科学的領域にまで音楽の影響を言及しているのは、我が国には見られない特徴である。

３　中国・天津华夏未来幼儿教育集团の幼稚園における音楽教育活動

⑴　「音楽課程」の音楽活動

先の「音楽課程」には、音楽活動の実際の運用として、活動をいくつか組み合わせた主題構成をとっており、二つの主題を紹介している。記載されている主題と活動は以下の通りである。

・主題名称：私たちはみな良い友達だ＜小班（＝年少、引用者注）１学期）＞
　活動１：歌曲　ヒヨコとアヒル
　活動２：音楽感知－声音の長短
　活動３：舞踏(おどり)－私たちはみな良い友達だ
・主題名称：涼しい夏＜中班（＝年中、引用者注）２学期＞
　活動１：歌曲　夏の雨
　活動２：音楽遊戯－Hello　夏
　活動３：音楽表現－夏の服装（ファッションショー）

一見してわかるように、歌ったり音楽的要素を理解させたり、踊ったり、ファッションショーを組み合わせたり、と一つの主題でいろいろな活動を組み合わせている。

以下に、これらの活動を主題別に紹介し、考察を述べる。翻訳部分はゴシック体で示した。なお、活動中の楽譜は原本では数字譜であるが、五線譜に書き改めた[10]。

①　主題「私たちはみな良い友達だ」

一、主題名称：私たちはみな良い友達だ(年少　１学期)[11]

領域環境の創設

◆　芸術的に魅力ある音楽環境を作る。幼児のために、芸術的に魅力ある音楽環境を創設し、音楽をクラスの文化にする。例えば、食事、睡眠などの場合には、軽やかでゆったりとした楽曲を選択する。起床、トイレの場合には、軽快で活発な楽曲を選択する。知己活動や登園、帰宅にもそれぞれにふさわしい音楽を背景に流し、良い影響を与える。

◆　「私たちは皆良い友達だ」の主題を壁に貼る。主題教育と結合させて、環境を作る。ヒヨコやアヒルの鳴き声をし、自分の友達の絵を貼る。教師は環境を作る中で、幼児の参加を促し、子どもたちの間の親しい感情を強め、クラス、グループの意識を強め、幼児が先生や友達を愛する心を養う。

◆　ゆったりとした、調和のとれた生活環境を作る。先生方の人間関係は、知らず知らずのうちに子どもたちの情感教育に影響する。礼儀や相互の関心、手助けは、みな子どもたちの真の友情の体験となり、日常生活で仲良しになる幸せを体験することができる。

活動場面での提案

◆　表現の場：教師は幼児のためにヒヨコやアヒルのかぶり物を置き、表現や遊びにあてる。録音機やテープなどを準備して表現時に使用する。

◆　智恵の場：長短いろいろの縄やものさし、鉛筆、紙などを置き、ものには長短があることを幼児に感じさせる。あわせて興味に応じて比較させ、比較の結果を言葉で表現させる。

◆　言語区域：おはなしを語る環境を作る。同じくひよこやアヒルの飾りと人形など幼児の好きそうなおもちゃを置き、幼児に大胆に語らせ、幼児に話の表現力をつけさせる。

家庭と幼稚園の協力に関する提案

◆　保護者には、子どもが日頃から同年齢の友達と遊ぶようにお願いする。子どもには、人と交わり、友達の良い点を理解し、友達に交わることを体験させる。日常生活では、礼儀や人と交わるときの作法を教え、子どもがうまくできるようにさせる。保護者は時に幼児

が園でどのように人と交わっているかを尋ね、それに関心をもつ。

◆　保護者は子どもが音楽を鑑賞させ、いろいろな音楽的美を感受し、小さいときから音楽に親しませ、楽しんで表現するようにさせる。幼児の好きなことは、保護者が一緒になって遊んでやるのがよい。子どもが身体、精神、個性、社会性などの方面で良い発展をするようにさせる。

日常生活への浸透

◆　日常生活の各場面で楽曲を流し、幼児が自主的に自由に聞き、表現し、唱わせる。

◆　幼児が歌曲を歌うのをすすめ、大胆に自己を表現できるようにする。

◆　はなしを語らせる：「さるのおもてなし」では、さるがどのように自分の友達をもてなすのかを感じさせる。

◆　日常の各場面で、幼児を他のクラスへ行って参観させ、そのクラスの先生を認識させる。ためしに新しい友達と交わらせ、大胆に交わるようにさせ、何人かの友達の名前を覚えさせ、初歩的な交流を進める。

附録（おはなし）　サルのおもてなし

こんなに多くの美しい樹林。草は緑で、花は開き、小鳥は木の上でチチチと鳴いている。

今日、サルは特別にうれしい。友達がおうちにやってくる。「どうぞ、どうぞ」大きなゾウに小さなパンダ、小さなウサギ。みんなやって来た。

サルは丁寧にお客を座らせ、籠の中から桃の実を取ってみんなに食べさせる。

サルはまず赤くて大きい実を取って、ゾウに食べさせた。ゾウが「ありがとう」と言うと、サルは「どういたしまして」という。サルはまた赤くて大きな実を取って、パンダに食べさせた。パンダが「ありがとう」と言うと、サルは「どういたしまして」という。

最後にサルは青くて小さな実を自分に残しておいた。ゾウはサルに尋ねた。「君はどうして赤くて大きな実を食べないの？」サルは言った。「だって、赤くて大きな実は、お客さんのものだから」。

友達は言った。「サル君は親切だね。」

活動１：歌曲－ヒヨコとアヒル

活動の中心目標

１．歌曲のメロディの変化を感じさせ、基本的に休止符に従って唱うことができる。

２．ヒヨコとアヒルが一緒に遊んでいて楽しそうだなという情感を感じさせ、友達の情感を体験させる。

３．みんなの前で楽しく自己を表現し、一定の表現力を持たせる。

各種の準備

◆　前期経験準備：音楽に対して興味を持ち、先生と一緒に唱ったり表現したりするのを好み、いくつかの小動物の生活習性を理解し、その鳴き声の区別を知る。

◆　準備物：主題の飾り「わたしたちは良い友達だ」の中で、ニワトリやアヒルが友達と交わる部分の飾り；ヒヨコやアヒルの人形、かぶりもの若干。

活動の主要過程

◆　リズム、音楽表現

１．教師は幼児に「私のヒヨコ」をやさしく聞かせ、幼児に快活な音楽の性質を感受させ、先生と一緒に大胆に表現させる。「コココ、私のヒヨコ」と唱うと、子どもたちは一緒に小さな手を伸ばしてヒヨコがついばむ表現をする。児童に音楽のリズムを感じさせ、一歩一歩あるき、小さな手で虫をついばむ。

２．反復して歌曲に耳を傾け、幼児の積極性を引き出す。子どもたちがヒヨコの友達は誰かに関心を向け、手まねの表現を通じて幼児の興味を引き出し、愉快にアヒルを見てヒヨコとアヒルが友達であることを知る。

◆　歌曲を聞いての各種の表現

１．教師の質問；歌の中にはだれがいますか？彼らはどのように鳴きますか？

２．「ヒヨコとアヒル」の歌を流して、子供たちによく聞かせ、歌詞を理解し先生の質問に楽しく答えられるようにする。

３．子供たちに自由に発表させる。ヒヨコとアヒルの鳴き声がどのように違うか？それぞれひよことアヒルの鳴き声を表現した図を壁に貼る。

４．子どもと先生が一緒にもう一度歌を聞き、コココとガガガの場面になったとき、子供たちに手を伸ばして先生と一緒にひよことアヒルの動作をさせる。口ばしのとがったヒヨコと平たいアヒルの表現を大胆に表現させる。

５．幼児と先生が一緒に歌を歌う。休止符があるところで教師は手を打つか、何かをたたくか、別の楽器を鳴らすかして、子供たちに感じさせる。短く切ったり静かにさせたりして、幼児が休止符の歌い方を感受し、リズムとメロディ通りにできるのを助ける。

◆　二人一組になり、表現させる

１．みんなでヒヨコとアヒルを歌うときには、きれいな声で歌い、また感情をこめて歌えるよう指導し、初歩

的な表現力を養う。

2．子どもたち一組ごとにヒヨコとアヒルに扮し、それらはどんな顔をしているか、どのように二人で演技するかを考えさせ、うまく表現できるように指導する。

3．音楽の愉快な進行にあわせて、何組かの子供たちに、みんなの前で表現させ、幼児の表現願望を鼓舞する。

活動の要素

◆　活動の重点；歌はメロディと休止符に従う。活動の難点；各種の形式をとおして、幼児が楽しく音楽に従って歌うようにさせ、正しいリズムとメロディで歌わせる。

◆　観察の重点と評価の指標

1．幼児が歌の活動に楽しく参加しているかどうか、表現しているかどうか。

2．幼児が楽しく表現しているかどうか、音楽に対して興味を示しているか。

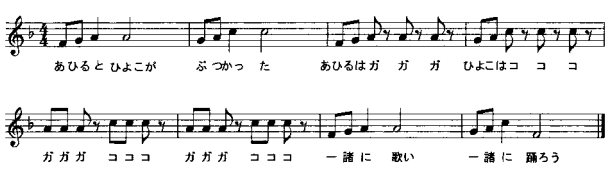
◆　楽曲の性質や歌詞の内容、強弱の変化を理解する過程では、理解と感受がとても重要である。幼児の感知能力を養成するには、教師は幼児が討論や回答に参加し具体的にどう反応するかを通して、的確に指導する。

◆　幼児に何度も楽曲を聞かせることは、幼児が歌唱方法を獲得する最も良い道筋である。単一の解説や断片的に聞かせるのをやめる。そんなことをすると、幼児は感受性をなくし自信を失う。

活動の反省と評価点

遊戯と情感ある環境で音楽の美しさを感受するのは、年少児の音楽活動の大きな方法である。模倣を楽しみ好奇心の比較的強い年少児にあっては、基本的に教師の設定した愉快な環境の中に進んではいりたがる。喜んで遊戯をする年少児は、活動の最初の部分の表現で満足する。活動の後の部分では、自由に表現させグループを組ませて表現させる。音楽に接する最初の段階では、幼児の自主的な表現能力の培養を重視し、将来に形成される比較的強い表現活動の基礎にする。

附録（歌曲）　　ヒヨコとアヒル



楽譜１

活動２：音楽感知ー声音の長短

活動の核心的目標

1．よく音声の長短を知り、それぞれの声音の長短を模倣させる。

2．音楽、遊戯の興趣を十分に体験し、演奏の変化を発見する。

3．楽しく表現し、参加する。

各種の準備

◆　前期経験準備：音楽に対して興味を示し、先生と一緒に楽しんで歌い、あるいは表現する。いくつかの小動物の生活習性を理解し、その鳴き声の区別を知る。

◆　準備物：それぞれの小動物のかぶりもの若干、ピアノ、ラジカセ、カセットテープ、ＣＤなど。

活動の主要過程

◆　韻律表現「ヒヨコとアヒル」

1．子供たちが音楽の表現に参加したら、教師の誘導で愉快に表現し、音楽のリズムや韻律を感受し、表現する。

2．ヒヨコやアヒルの友達がやってきて、遊戯に参加するのを歓迎する。子羊、子犬、子猫などの小動物が、みな愉快に遊戯をする。

◆　小動物の鳴き声

1．教師がヒヨコと子猫の絵を示し、その鳴き声の違いは何かを利かせ、子供たちに学ばせる。「ココココ、にゃお」

2．子供たちに誰の鳴き声が長くて、誰が短いかを言わせる。同時に、子供の頭に思い起こさせる。どの動物の声は長く、どれは短いか。「わんわん、めー」

3．教師は子犬と子羊の絵を見せ、同じようにする。

4．教師は幼児に一緒に言わせる。長い音を聞いたら胸を手で打ち、短い音を聞いたら、手を縮める。教師がピアノを弾いて、別の音で長短を聞かせる。

5．小動物がみなやってきたら、一緒に歌を歌う。しかし声がそろっていなければ、子にどうすればよいか考えさせる。

6．動物の大合唱。

「わんわん、めー」

「ココココ、にゃお」

7．遊戯が進行して最後のころに、幼児にいろいろな動作を創作させ、音楽に合わせて表現させる。

◆　幼児にその他の動物の長短の鳴き声を使って比較させる

1．子供たちに自分がどんな動物の鳴き声を知っているか、言わせる。

2．「かわいい・・（動物）・・は、・・・と鳴く」歌と音楽を表現する。子供たちは教師の伴奏によって一斉に歌い、歌の優美さや音声の動きを聞き、歌いなが

ら表現することを学ぶ。

活動要素

◆　活動の重点：声音の長短を感知する。難しい点：よく声音の長短の実質を理解させ、音楽に合わせてふさわしい表現をする。

◆　観察の重点と指標

1．幼児が音楽活動の中で一定のリズムを表現できるか

2．幼児が正確に長短を分別し表現できるか

3．幼児が音楽表現を楽しんでいるか。

◆　音楽活動を組織する過程で、教師は子供に感知と体験の主旨にそって活動する。

◆　幼児が大胆に表現することを勧め、子供が全員の前で進んで表現する習慣をつけさせ、自分の表現に自信をつけさせる。同時に、将来、正確に各自の行動を分析し、他人の良い点を発見し、まねることができる力を養う。

活動の反省と評価

小動物は幼児の良い友達なので、知らず知らずのうちにそちらに興味が行ってしまうことのないように十分に注意する。我々はそれぞれの長短の音を感じるようにさせ、体や言語、説明、表現参加を通して、その意味を子供に理解させる。表現道具を設けることにより、いろいろな音の違いを体験し、表現力を増強させる。

活動３：舞踏（おどり）ー私たちはみな良い友達だ

活動の核心的目標

1．喜んで音楽を聞き、動作をし、表現を楽しむ。

2．教師の指導のもと、リズムに合わせて動作し、一定の楽趣をつくる。

3．少し協力することを知り、そのあと友達と交流する。

各種の準備

◆　前期経験準備：音楽の進行に合わせて喜んで表現する。常に歌唱、遊戯、表現活動に参加し、教師の指導のもとで大胆に表現する。

◆　準備物：「私たちはみな友達だ」の音楽

活動の主要過程

◆　幼児に歌を鑑賞させる

1．幼児にどのような歌詞か、曲の中の子供は何をしているのかを聞かせ、大胆に答えるのを指導する。教師は幼児によく聞かせ、歌曲の優美さを感受させる。

2．幼児に音楽に沿って歌わせ、歌詞の意味をざっと理解させる。自分の言葉で歌の中の友達がどんな動作をしているのかを言うことができ、歌詞の表現法を熟知させ、教師と一緒に歌い、表現できるようにさせる。

◆　愉快に踊る

1．子供たちに、歌詞にふさわしい動作をさせる：いろいろな歌に応じてどのような動作をするか、みんなで友達と学ぶ。

2．教師は幼児を一定程度指導し、幼児にいくつかの動作をまねさせる。何度か音楽を聞かせ、幼児が音楽をよく知るようになり、ふさわしい動作ができるようにする。

3．幼児の協力を促し、二人が情感を持って表現できるようにする。

◆　おどりの基本動作をつかんで、自由に表現させる

活動の要素

◆　活動の重点：よく音楽を聞いて動作をする。難しい点：リズムに合わせて一定の表現力をもって表現する。

◆　観察の重点と評価指標

1．幼児が喜んで音楽を聞き、表現できるか

2．幼児が動作の創作をし、演奏に合わせて表現できるか。

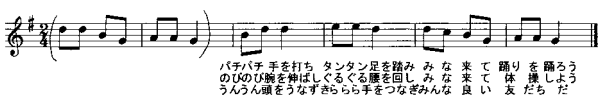
◆　幼児には自分で表現を創作させ、あるいは他の友達と違う表現をさせる。つまらない動作や模倣をやめ、自主的に学習し交流協力させる。

◆　年少組の年齢特性に応じて、短い音楽や興味のある音楽を選び、幼児がうまく表現し、興味を引かせるとともに、幼児を掌握できるようにする。

活動の反省と評価

音楽にあわせて表現するときには、自由さと大胆さを勧め、大人の考えや既にあるような決まった子供の考えはしないようにする。教師は幼児に音楽を聞かせ、リズムに合わせて表現させる。幼児が大胆に創作し、想像力と創造力を発揮させる。

附録（歌曲）　　私たちはみな良い友達だ



楽譜２

第一段

１－２小節：二回手を打ち、二回足踏み

３小節：自分が一回手を打ち、相手が一回

４小節：二人で手を挙げる

第二段

１－２小節：二回腕を伸ばし、二回腰を回す

３小節：自分が一回手を打ち、相手が一回

４小節：二人で手を挙げる

第三段

1－2小節：二回うなずき、二回手をつなぐ

3小節：自分が一回うなずき、相手が一回

4小節：二人で握手

考察

この主題の特徴のひとつにあげられるのは、主題の実践を、幼児を取り巻くすべての状況から具体的にとらえて実行しようとしている点である。つまり、どのような環境を設定し、幼児のどういう方面をのばそうとしているのか、そして、どこまでその活動を浸透させようとしているのかが明確であるということである。

まず、実践の範囲として、園生活から家庭環境までを想定している。主題冒頭では領域環境の設定として、音楽を使った、生活環境まで含めた環境づくりの必要性が述べられている。わが国においても、鈴木メソード[12]を取り入れるなどして、自由遊びの時などに静かな音量でクラッシック音楽を流すといった、音環境を重視した幼児教育実践は各地で行われているが、この主題部分では、さらに細かく場面に応じた音楽の指定がみられる。また、家庭にも協力を提案しているところが興味深い。保護者に子ども同士遊ばせたり、子どもにともだちとの交流を尋ねたり、一緒に遊んだりすることを要請するだけでなく、小さい時から音楽に親しませることまで言及している。実践においては、家庭まで含めた環境構成を設定していることがわかる。

また、ねらいをとらえる範囲として、表現の場から言語の場までとりあげ、それらに関わる具体的な環境や教具の設定まで示している。さらに、主題で行う活動が単発で終わるのではなく、日常生活への浸透し得るような手立てまで示している。それらは、「○○に親しませる」「○○を遊んで楽しむ」というような抽象的な書き方ではなく、たとえば「サルのおもてなし」という具体的な話をあげ、どのようにサルがもてなしたかを考えさせる等、非常に具体的な指示になっている。

二点目の特徴は、歌曲を通じて、指導のねらいについて多方面から焦点を当て、またそれらが詳細に示されているということである。

一曲目の歌曲は「ヒヨコとアヒル」であるが、活動1では、アヒルとヒヨコの様子について、音楽表現、身体表現、知識的理解、社会面からイメージさせようとしている。たとえば、休符にしたがって、おそらくスタッカートで軽快に鳴き声を表現させたり、くちばしの動きをヒヨコとアヒルで違いをつけて手まね表現させたり、あるいは小動物の生活習性や鳴き声の区別を知らせたり、ヒヨコとアヒルが友達で楽しそうだという様子を示したりという具合に、である。活動2も同様に、同じ曲を使いながら今度は子羊や子犬を登場させ、いろいろな小動物の表現を、歌ったり、身体表現したり、知識的理解を確認したりする中で創作させていることがわかる。

二曲目の舞踏「私たちはみな良い友達だ」の方は、音楽にあわせて二人組でふさわしい動作を取ることによって、子どもたち同士の交流・協力関係を学ぶというように、ねらいの方面が先に比べて絞られてくる。しかし、「一緒に踊ることによって、みんなで踊る楽しさを味わう」というような漠然としたねらいではなく、細かい動作の動きが示され、歌詞の表現方法を熟知させたり、子どもたち同士の動きを言葉で言うことをめざしたり、というような詳細なねらいや指示がみられる。

三点目の特徴として、楽曲すべてに、音楽的要素のための学習が含まれている、という点である。選曲の観点に、子どもが嗜好しそうな曲とか、愛好されている曲から選ぶ、という観点が見られない。そして、詳細に、音楽的要素の学習に関する記述がある。活動1ではスタッカートの表現ができるように学習が組まれているし、活動2では、小動物を変えて、音の長さの長短に気づかせている。また楽曲は、アヒルとひよこで鳴き声がa^1音とc^2音で示され、それぞれの鳴き声のイメージにあわせて音高が変わっており、二種類の小動物がいることがわかりやすく、表現しやすい楽曲になっている。また、活動3の曲は、手や足等によるさまざまなリズム行動を通して、拍にのる活動の徹底をはかっている。

つまり、主題「私たちはみな良い友達だ」に沿って、ヒヨコとアヒルの動作、小動物の動作、子どもたち自身の動作と発展する中で情感を感じさせていきながら、同時に、音楽方面の綿密な学習過程が組まれ、あわせて多方面との関連も具体的に示されたものになっているということができよう。

② 主題「涼しい夏」

二、主題名称；涼しい夏（年中組、2学期）

領域環境の創設：

- ◆ **夏を主題とした飾りを設定する。まず幼児に夏の特徴を感じさせ、夏には雨が多いことを理解させ、夏の変化に注目させる。**
- ◆ **背景音楽の放送；いろいろな音楽を一日の生活のいろいろな場面で流し、幼児に音楽の美しさを感じさせ、少しずつ音楽の美しさを体験させる。**

活動場面での提案：

- ◆ **表現の場；教師は幼児に鈴やトライアングル、シンバルなどの楽器や録音機、テープを準備する。はじめにいろいろな楽器の音色を聞かせ、幼児が楽器をたたいて楽しむようにさせる。ざっといくつかの楽器を一**

緒にあわせて演奏し、楽曲の背景音にある共同演奏を楽しませる。

◆　知恵の場；大雨、小雨の絵を置き、幼児に並べさせる。

家庭協力への提案

◆　保護者に子供と一緒に街や広場、家の周りの路上を注意深く観察し、夏の特徴を体験させる。簡潔明瞭に夏の特徴を紹介する。あわせて子供の好きな夏の風景を写真に撮る。あるいは絵にかく。保護者は子供の見たことや感想を言わせ、記録するのを手伝う。

◆　保護者は子供が四季の写真や書籍、絵などを探すのを手伝い、子供にそれを観察させ、筋道の通った言葉でそれを言わせ、幼児の夏の知識を豊富にする。

日常生活への浸透

◆　日常生活の各場面で、楽曲を流し、幼児に静かに聞かせ、表現し、歌わせる。

◆　幼児が歌い、大胆に自我を表現させる。

◆　話しをさせる：楽しい夏。夏の美しさを体験し、幼児の夏の経験を豊富にする。

附録（おはなし）　　楽しい夏

ある日、コオロギは退屈になり、親友を訪ねることにした。三本の美しいヒマワリを摘んで出かけた。

道ばたで、コオロギはカタツムリさんに会った。コオロギは尋ねた。「君は私の友達のセミさんに会わなかったかい？」カタツムリさんは答えた。「セミさんは、あの大きな木の上にいるわ。」

コオロギは５分ほど歩くと、セミが木の上で唱っているのを聞いた。コオロギは木の下で大きく口を開け、セミと一緒に唱った。コオロギはとても楽しい気持になった。

セミの家を離れると、コオロギはハスの花の池に向かった。このとき、空には厚い雲がたちこめ、ぽたぽたと落ちてきた。コオロギはハス池に走り、大きな声でさけんだ。「カエル君、カエル君、ぼくが来たよ。」

カエルはハス池から飛び出して、コオロギを迎えた。二人は一緒に大きな葉っぱの下に隠れた。ぽたぽた落ちる雨の音を聞きながら、カエルが作ったハスのアイスキャンディーを食べ、コオロギはとても楽しい気持ちになった。

雨がやむと、だんだん暗くなってきたので、コオロギはカエルの家を離れて、ホタルの家に行った。二人はおいしいごちそうを食べ、涼しい石の上で星を眺めた。

空がいよいよ暗くなったので、ホタルは灯火をつけてコオロギを送った。二人は静かに草の上を歩き、コオロギは楽しい気持ちになった。

コオロギは家に帰ると、とても満足してベッドに横になった。コオロギは思った。「今日の夏の日は、とても楽しい一日だった。」

活動１－歌曲－夏の雨

活動の核心的目標

１．歌曲中の強弱の変化を感じさせる

２．音楽に対する興味を持たせ、変化する強弱で大雨と小雨を表現する。

３．グループの前で自己を表現し、一定の創造力を持たせる。

各種の準備

◆　前期経験の準備；一定のリズム型を把握し、リズムに沿って拍手をしたり腿をたたいたりして、そのリズムを奏でる。

◆　準備物：「夏の美しい景色」の絵（夏の季節の特徴物：池のハスの花、茂った草むら、涼しい服装の人物など）。大雨の図と小雨の図若干。音の準備；ピアノ、録音機、テープ、ＣＤ：大雨小雨のテープ、強弱記号のカード「ｆ」と「ｐ」。

活動の主要過程

◆　歌曲を鑑賞する「大雨小雨」

１．幼児に自由に教師の周りに座らせる。教師は優美な動作と、ゆったりとした表情でリズムを奏で、幼児に楽曲の内容と演奏を体得させる。

２．教師は幼児に静かに聞かせ、「いつの時期が雨が多いか」「歌曲中の子供はどうしてハハハとわらったのか」に気付かせる。話と飾りを見ながら、歌詞を熟知させる。

３．反復して楽曲を聞かせ、子供に大胆に話し合いに参加させる。自分の感じたことを発表し、自分の考えを友達に聞いてもらう。

◆　教師は大雨と小雨の音を対比して、楽曲中の強弱の変化を体得させる。

１．教師の質問：「歌曲の中で、大雨と小雨はどのように違いますか。音声にはどんな違いがありますか。」

２．大雨小雨の録音を流し、子供たちに違いをわからせ、図と情景を思い出させる。

３．子供たちに話し合いをさせ、どのように大雨と小雨の違いを表現するか、絵を使って表現させる。歌曲を聞いて、大雨と小雨の図を貼る。いろいろな動作で表現させる。教師は音楽の強弱をこどもにわからせ、楽譜にある「ｆ」「ｐ」を指摘する。

４．子どもと教師は一緒に演奏に合わせて遊戯する。教

師は子供が知っている演奏のカードを出し、幼児は手や、腿を打って表現し、強弱でリズムを表現させる。

「f」；　＊　＊　｜＊＊＊｜

「p」；　＊＊＊＊　｜＊　0　｜[13]

◆　幼児に歌曲を鑑賞させたあと、自分の表現方法で「大雨小雨」を表現させる。大胆に歌い表現させる。

1．グループで「大雨小雨」を歌い、大雨と小雨の違いを鮮明にさせる。「ざあざあ」「しとしと」の違いを示し、強い音は爆発的で短く、弱い音は軽く表現させる。

2．幼児にすすんで表現させ、自分で創造し歌う過程で、子供の創造性と想像力を養う。

活動要素

◆　活動の重点；正確な強弱を知る。表現の過程で音楽の強弱を体験する。

◆　観察の重点と評価の指標

1．幼児が表現に参加し、強いリズムを表現できるか。

2．いろいろな動作で強弱を表現できるか。

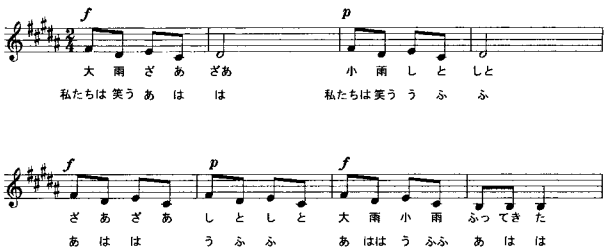
◆　楽曲の性質や歌曲の内容、強弱の変化を理解するなかで、歌曲の理解と感受性が重要である。教師は幼児が話し合いに参加して問題にこたえる中で、ふさわしい指導をする。

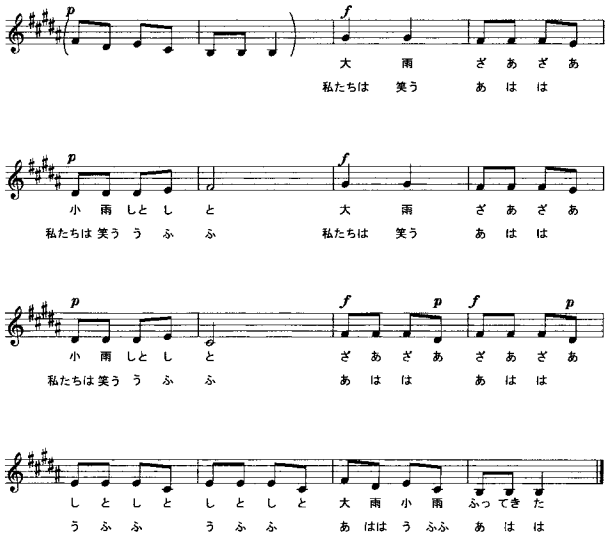
◆　幼児に何度も楽曲を聞かせることは、幼児に歌唱方法を把握させるためおよい方法である。画一的な解説や無味乾燥な説明は避ける。

活動の反省と評価

これは非常に活発で内容が幼児に適した歌曲である。子どもたちは音の強弱を体得することができ、教師の指導のもとで、いろいろな表現をする。活動を組織し行う中で、教師は絵による表現やリズム、歌などいろいろな表現形式の方法を設ける。子どもたちに愉快に活動させ、遊戯の中で体験し表現させる。

附録（歌曲）　　大雨、小雨[14]





楽譜 3

活動 2．音楽遊戯－Hello　夏

活動の核心目標

1．いろいろな演奏型に応じて動作ができ、動作に協調性と一定の表現力がある

2．音楽遊戯の楽しさを十分に体験し、遊戯のきまりを理解し、友達と交流できる

3．喜んで創造し、自分の体験を表現できる。

各種の準備

◆　前期経験準備：一定の演奏を理解し、図を見て、手や腿を打つ形式で奏でる。

◆　経験準備：涼しい夏の日の活動で、夏に対する特徴を一定程度理解し、日常生活で「Hello夏」を歌うことができる。

◆　準備物：いろいろな音楽のカード、音楽設備、ピアノ、録音機、テープなど

主要な活動過程

◆　教師は「ハロー夏」の主旋律を奏で、子供が表現する。子どもは音楽を背景に自分の音楽に対する感性を表現する。

◆　教師は子どもに、歌いながら遊戯をさせる

1．歌の中で何度、夏と言ったかを子供に聞かせる。そのあと、子供にどのように夏の喜びを表現するか、考えさせる。

2．教師は、いろいろなリズム型（＊＊｜＊＊＊｜など）を示し、子供たちに動作をさせる（手を打つ、頭を指す、肩を動かす、手を広げるなど）。

3．コオロギが愉快な夏の日に自分の友達を見つけた様子。子どもたちもその音楽を聞き、なつの歌を歌い、

教師が奏でたメロディに合わせて手を打つ。誰の反応が最も良いか見る。幼児に、歩きながら友達を探すまねをさせる。一つの音楽が終わったら交替する。

4．教師反音楽の速度を変え、幼児が音楽と遊戯に参加する気持ちを高める。変化する音楽中に、子供は美しさを感じ、動作をする。

5．遊戯の最後に、各自のそれぞれの動作を創作させ、いろいろな型で音楽を表現させる。

◆　幼児に夏の情感を表現できるように指導する。あわせて歌詞を改編する：ハロー夏、ナイス夏、ハッピー夏など。

1．子供に「自分の最愛の夏は…」を発表させる。

2．「ハロー夏」以外に夏をたたえる言い方は何か？を考えさせ、歌を改編して歌わせる。

3．すすんで歌い、グループで表現する。

活動要素

◆　活動の重点；いろいろなリズム型にあわせて表現する。難しい点；大胆に想像できるか、創作して動作ができるか。

◆　観察の重点と評価の指標

1．音楽の中で大胆に、調和して表現できるか

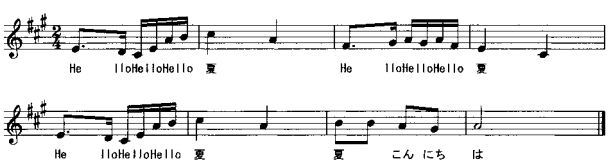
2．グループの中で踊り、交流できるか。

3．教師の指導によって、歌を改編できるか

◆　音楽遊戯を組織する中で、教師が示すリズム型によって幼児は動作をする。またみんなで演奏型を選び、一緒に動作をする。どの型も選ばずに、白のカードを選んで自分で書いて、創作してもよい。

◆　個別の指導：創作が苦手な幼児に対して、教師は能力のややある子どもと共同させ、幼児の体験を豊富にし、幼児が創造する興味を養成する。

附録（歌曲）　　ハロー夏



楽譜 4

活動 3 ：音楽表現ー夏の服装（ファッションショー）

活動の核心的目標

1．音楽のリズムに合わせて表現する。

2．教師の指導のもと、いろいろな動作を作り、流行の服を着て踊り、楽しむ。

3．みんなで協力する。

各種の準備

◆　前期経験準備：喜んで音楽を聞き、表現する。日頃から歌や遊戯、おどりに参加し、大胆に表現する。

◆　準備物：いろいろな音楽（ディスコ、民歌。軽音楽など）。保護者にはいろいろなきれいな服を準備してもらう。T型の舞台を設ける（ファッションショー）。

活動の主要過程：

◆　幼児に流行の服を鑑賞させ、表現し、描かせる。

1．幼児に服を観察させ、その美しさを感受させる。

2．服を観察する時、どのように展示するかを考えさせる。いろいろなやり方があり、舞台でぐるっと一回りするのはどうしてかを考えさせる。

◆　幼児に服を着て表現させる

1．幼児にいろいろな音楽を提供して、順番に舞台を歩かせる。よく音楽を聞いて、自分の表現を変える。軽音楽のときはゆっくりと、ディスコのときは大胆に飛ぶように。

2．教師は幼児にいろいろな動作を示し、まねさせる。表現の回数に従って動作を増やし、幼児に新型の動作を考えさせる。顔の表情に注意し、うれしい表情をするように気をつけさせる。

3．自分の表現とともに、友達の表現も加え、二人、三人で表現させる。

◆　他のクラスの幼児にも表現させ、子供の自信をつけさせる。

活動要素

◆　活動の重点：服装表現の技法を把握する。難しい点：自主的な表現をさせ、大胆に表現させる。

◆　観察の重点と評価の指標

1．幼児がメロディに合わせて、協力して舞台を歩けるか

2．幼児が音楽に合わせて歩く中、一定の表現力を出せるか

3．幼児がみんなの前で思い切って表現できるか

◆　幼児が紙や包装紙を使って流行の福を創作し、自分で作った服を着て表現させても良い。

◆　この活動を敷衍して、幼児にデザイナー、モデル、ディレクター、写真家、舞台設計などの役割を分担させ、交流の能力と組織能力を高めるのも良い。

活動の反省と評価

服装の表現について、幼児はとても興味を示す。教師は幼児がいろいろな技巧を表現できるよう、幼児と一緒に舞台の歩き方や隊列の変化、造形姿勢の表現を指導する。ファッションショーの中で幼児が十分に音楽と表現

を楽しむため、しっかりとした舞台を設定し、幼児に自由に創造させる。

考察

主題２にも、主題１の考察で述べたような特徴がよく顕れている。主題１のように社会性の発達を見てとる主題ではないからか、とりあげる環境構成や場面は主題１より広くはないが、やはり保護者への提案も掲載しており、家庭と幼稚園が連携して主題の実践を行うように構成していることがわかる。

こちらの主題で興味深いのは、ひとつには夏というテーマから実にいろいろな活動を組み合わせていることである。「楽しい夏」というおはなしは、夏に出てくる虫や蛙などを登場させ、蝉が木で鳴いているのに気づかせたり、蛙が水辺にいたり、夜になると蛍が光るという理科的知識を踏まえながら情景を話し合うことができるようなおはなしになっている。また、夏の変化として雨をとりあげ、一曲目の歌曲には「夏の雨」という曲を設定しているが、これはフォルテやピアノといった強弱を表現する活動になっている。「Hello夏」の遊戯では、体の動作を入れたり速さの変化を出したりするなどの音楽要素を取り入れた活動もあるとともに、あわせて歌詞をハローから、ナイス、ハッピーに変化させたりするなど、英語教育を意識させた活動も組み合わせている。最後のファッションショーは、これがなぜ夏の設定なのかは不明であるが、音楽によって舞台での歩き方や表現を変え、また衣装の変化もまじえるなど、表現の総合的活動をさせるものとなっている。音楽で「夏」を感じさせるというと、歌詞に夏の情景がイメージできるものを歌うとか、夏の風物の中の音を探す、といった活動はわが国でもよくみかける。が、そこからフォルテやピアノという強弱理解に踏み込んだり、ファッションショーのような総合的な活動を取り入れたりするというような組み合わせは珍しい。

また、もう一点興味深いのは楽曲である。主題１でもそうであったが、音楽要素や語学の学習にあわせた楽曲をとりあげている。主題１，２あわせていずれの曲も作詞・作曲者が記載されていないので、「Hello夏」以外の原曲は不明である。が、「Hello夏」以外は、いずれも六度しか音程差がなく、リズムもメロディもきわめて単純な歌であり、学習の目的にそって創作された感が強い歌である。また、「Hello夏」は、付点八分音符と十六分音符の組み合わせを八分音符のみに変えるなど、リズムを単純化しているが、原曲はアメリカの「リパブリック讃歌」である。これは黒人解放運動に立ち向かった白人ジョン・ブラウン（John Brown）を讃えた歌として有名であるが、一方で日本では「おたまじゃくしはかえるの子」や「ごんべさんの赤ちゃん」「友達讃歌」などの替え歌で知られている。この「音楽課程」においても、「夏」のイメージや語学学習のために歌詞が替えられているものと推察できる。

⑵　他領域課程に見られる音楽活動

①　健康領域課程[15]における音楽活動

以下は、健康領域課程で掲載されている歌である。「良い習慣を養成する」という主題の中の活動１「自分のことは自分でする」の中に収められている。日常生活の中で、自分のことは自分でできるように、歌を歌ったり、教師の質問を受けたり、実践したりするような活動を行うように設定されている。なお、他領域課程に掲載されている楽曲は歌詞のみ示されており、音楽領域課程のような数字譜はない。

附録（子どもの歌）　　自分でできる[16]

自分でできた、自分でできた
自分で起きた
自分の服は自分で着て
自分のおもちゃは自分でかたづける
自分のごはんは自分で食べ
自分の顔は自分で洗う
自分のことは自分でする
こんなにじょうず、おりこうさん。

また、活動２「手をきれいにしよう」に掲載されているのは、次の歌である。「手を洗う」の図を見せ、図を見て質問したり、「手を洗おう」の歌を歌ったりして、正確な手洗いの方法を身につけさせることになっている。

附録（子どもの歌）　　手を洗おう[17]

袖をまくって、手を洗おう
蛇口をまわして、手を洗おう
蛇口を締めて、石けんつけて、
手のひら、手の甲、指の先
蛇口を開いて、洗い流し
蛇口を閉じて、水を落とし
ハンカチ出して、手をふこう

考察

学習させたい内容をストレートに歌った歌である。特に、「手を洗おう」の方は手を洗う順番が現実的であり、蛇口を開いたり閉じたりするところまで詳細に示されている。前掲の「音楽課程」の中に、健康領域中の保健常識等については歌曲を通して学習し、平板な指導にならないことと示されているが、指導したい内容を直接歌詞

で示した歌になっている。

わが国でも手洗いの歌はいくつかあるが、最近では石鹸会社から発表された以下のような歌が幼児教育現場でも歌われている。

ビオレママの手洗いのうた[18]

おねがい　おねがい　カメさん　カメさん
あの　さんかくのお山のうえで　おおかみさん
おっとっとっと　おっこちそう
いそいでバイクを　ぶるるん　うんてん
ききいっぱつ　つかまえた
ありがとう　カメさん
みんなでごちそうです　手をあらいましょ
タオルでふいたら　いただきます

この歌は、歌詞で手を洗う場面を示しているのは、一見、上から７行目だけのように見えるが、実は、１行目の歌詞からその歌詞にあわせた手遊びがついていて、石鹸泡をつけてその手遊び通りに手指を動かせば、自然に、きちんと手洗いができるようになっている。石鹸会社のコマーシャルとして制作された歌であるだけに、子どもに親しみやすく、またすぐに手洗いをやってみたくなるような工夫がなされた歌である。やってみると遊びながら無意識に丁寧な手洗いをすることができる。が、しかし、歌の中に出てくる歌詞や登場人物を忘れてしまうと、何をどうするのかわからなくなってしまうともいえる。つまり、子どもの目線を意識して、それと感じさせずに行動させてしまうことに主眼が置かれているのである。それに対して、先の歌は、あくまで正しい手洗いの方法を忠実に表した、規範意識の高い歌になっている。その点に、共に楽しく手洗いするために歌を用いようとはしているが、日本と中国の子どもに対する指導観の違いが垣間見える。

②　言葉領域[19]における音楽活動

この領域における音楽活動は、先の２の⑵で掲載したように、「音楽課程」においても、言語と音楽との交流により双方の能力の育成をはかる、という理念が示されている。したがって、言語領域中に示される音楽活動にも、やはり言語と音楽にかかわったねらいが見受けられる。

ここでは、言語領域課程に掲載されている主題「家」（年中　１学期）の中の活動２「お母さんに学ぶ」を中心に見ていく。以下に翻訳部分を示す。

活動２：お母さんに学ぶ[20]

活動の中心目標

1．喜んで歌を歌い、歌を理解し、大きな声で歌詞を朗読する
2．みんなの前で、大胆に自分を表現する。
3．学習歌を通して、家の人に対する感情を、言葉で表現する。

各種の準備

◆　お母さんの仕事がどれだけ大変か、家事はどれだけ大変かを理解する。

活動の主要課程

◆　歌曲の導入
1．歌曲「この世の中でただ一人のお母さん」を流し、母に対する気持ちを培う。
2．「良いお母さん」を題材に、自分の母を言葉で表現する。
◆　図を見て歌を歌う
３つの小動物が母に学ぶ図を見せて、幼児に尋ねる。
1．燕（アヒル、カエル）の子は、どのようにしてお母さんの仕事を知るの？
2．みんなは、お母さんに何を学びますか？考えましょう。
3．子どもが母に学ぶ図を見せて、幼児にその内容の話しをさせる。
4．教師が母の歌を歌う。
◆　グループ分けの朗読
幼児に試しに自分の表現を歌にさせる

活動の要素

◆　活動の重点：図を活用して朗読し、歌の内容を理解させる。難しい点：自分の話した内容をいかに歌の中に編入させるか。
◆　観察の重点と評価の指標
1．楽しく唱うか。
2．みんなの前で、自分を大胆に表現できるか。

活動の反省と評価：

幼児は活動中に、歌の内容を把握しているか。感情を込めて朗読しているか。言語の組織能力をさらに高めるには、日常生活での練習がより大切である。

附録（子どもの歌）　　お母さんに学ぼう

燕の子どもがお母さんに学ぶ
泥を口にして、行ったり来たり
新しい家を作っている

アヒルの子が、お母さんに学ぶ
川に入ってさかなを取る
川の水がははははと笑う
カエルの子どもが、お母さんに学ぶ
ぴょんぴょん跳びはね、けろけろ鳴く
害虫を捕まえ、作物を守る

子どもたちは、お母さんに学ぶ
両手を休めず、自分の仕事をする
私の良いお母さんに、感謝しよう

考察

上記では、まず、歌によって母への気持ちを培い、母のイメージを言葉に表させている。そして、次には、ツバメやアヒル、カエルが母親から学ぶという歌の歌詞を元に、自分の母親から学ぶことを考え、それを歌にさせている。つまり、歌うことで想像したイメージをことばに表し、そのことばを再び歌で表現する、という活動を通じて、相互の能力の発達をねらっていることがわかる。

親への恩を歌の歌詞から学ぶという指導は、わが国では戦前の学校教育には見当たる[21]が、現在の音楽指導においては見当たらない。ただし、今日においても、歌詞や歌の情景から情感を起こさせるという指導はないわけではない。音楽によってなんらかの情感が呼び起こされることは事実であって、特に歌唱表現の授業において、「どんな感じがしたか」と問う指導はわが国に多い。上記がそれと異なるのは、ただ感じたことを口々に言い合うのではなく、歌詞は母のどんな仕事を歌っているのか、自分たちは母の何を学ぶのか、という客観的に見えるもので言語活動していくところである。

⑶ 「华夏未来双语幼儿园」の幼稚園年少クラスにおける音楽活動の実際

筆者らは、先述したように、华夏未来双语幼儿园・幼稚園年少クラスの音楽活動を参観した。活動は、アヒルとネコとカメとウサギが出てくる曲を、それらの動物の身体表現を交えて歌わせるというものであった。教室の状況は、主指導の教師が一人、パソコン操作を行う補助教員が一人、園児が15名ほどであった。

以下に指導の流れを記載する。

① 主指導教師が、「白い体、赤い目、長い耳の動物は誰？」と問い、子どもたちは「うさぎ」と口々に応える。

② 補助教師がパソコンを操作し、ディスプレイ上に小さくウサギの画像を出す。主指導教師はそれを指して、「ウサギはどこにいる」と問う。子どもたちは画面に集中し、だんだんウサギの画像が大きくなって子どもたちにもそれとわかり、口々に「ウサギ」と応える。すると、主指導教師は「こんにちは」と声をかけるように促す。また、「ウサギはどうやって走る？」と問いかけ、動作をさせる。

③ 続けて、カメをディスプレイ上に登場させ、②と同様に進めたあと、「カメはどうやって歩く？」と問いかけ、動作をさせる。

④ 主指導教師は「あと二人友達がいるけど隠れている。さがしてごらん」と問いかけ、子どもたちは興味深そうに教室をみまわす。

⑤ 頃合を見計らって、補助教師がくじを引くような箱を持ってくる。その中にはアヒルとネコの小さなぬいぐるみが入れてある。主指導教師は、子どもたちに箱に手を入れて探すようにもちかけ、子どもたちはぬいぐるみを引き当てて歓声をあげる。

⑥ 主指導教師はこれら４匹の動物が出てくる歌だと言いながら、補助教師のオーディオ機器操作により流れてきた曲にあわせて歌って示す。

⑦ 子どもたちも共に歌う。

⑧ 歌の合間に、主指導教師は子どもたちに問いかけながら、「ネコは静かにきた」「カメはスローリスローリ歩く」「うさぎはピョンピョンはねる」「アヒルはゆらゆら揺れながら歩く」などを確認する。

⑨ 主指導教師が「今度は歌いながら動作してみよう」と呼びかけ、身体表現をまじえて数回歌う。

考察

指導の形としては、完全に教師主導型である。子どもたちが自ら動物たちや動物たちの動きを見つけたような気持ちになるような指導言の工夫はしていたが、教師の見つけさせたい動物やその動きに誘導している。また、誘導した身体表現は、歌詞にあわせていることもあり、ネコは静かに、カメはゆっくり、うさぎはピョンピョン、アヒルはゆらゆら、というように、それぞれの動物の形式的な表現である。しかし、年少クラスであり、それぞれの動物をイメージさせて、特徴をおさえるということは、この時期に重要なことでもある。

教師の指導は、実に巧みであった。

まず教材の提示の仕方も、子どもたちが飽きないように、最初はなぞなぞのように問いかけ、次はコンピュータ画像を用い、さらにボックスを用意するなど、常に子どもたちの目をひきつけるような工夫が入念に準備されている。

また、指導言も短く、常に発問の形でなされている。ことばかけのタイミングも歌の合間や歌にあわせてテンポよくなされている。

全体に、子どもたちは教師の巧みな指導言によって、

次々と活動を行っていった。活動の流れに無駄はなく、子どもたちは、さまざまな表現が成しえる形までスムーズに活動していっていた。

写真12　すわって主指導教師の話を聴く園児たち

写真13　主指導教師のリードにより、カメの身体表現をする園児たち

4　まとめ

以上、『全域性教育园本课程理念与操作』と「华夏未来双语幼儿园」の実践から、中国・天津华夏未来幼儿教育集团の、主に音楽教育を見てきた。

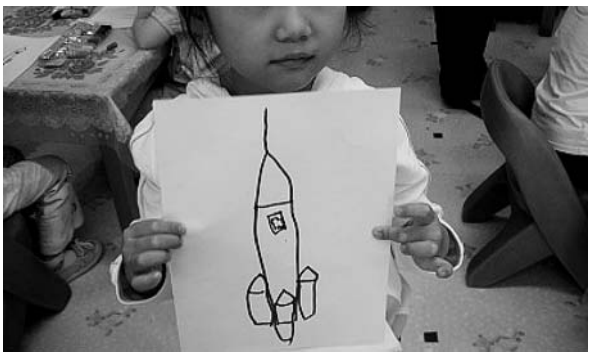
中国・天津华夏未来幼儿教育集团の音楽指導システムが教師主導の一斉指導型であることは、理念や活動方法、そして指導の実際からも明らかである。これは、天津市の小学校の音楽教科の授業でも見られる傾向である[22]。学習を協同からとらえるようになってきたわが国の教育の方向とは異なる[23]が、準備や教授方法に入念な工夫が見られ、一斉指導としてはすぐれた力量を持った指導が行われていることがわかる。

また、用いる教材には、教えたい内容を具体的・直接的に表すものが選ばれている。情感やイメージからとらえられやすい音楽教育においても、それは同様であった。音楽領域で示される歌は、主題の内容にそった歌詞があり、音楽の要素が指導できるもの、という教材選択の観点が明らかであり、他領域の活動においても他領域の内容に直接かかわったねらいから歌が使用されていた。

我々は、この他にも、2歳児の親子センター活動や保育園クラスも参加したが、こちらでも、指導や教材選択には、一貫した方法がとられていた。たとえば、親子センターの活動は、母親と一緒に人形を沐浴させる活動であった。人形を用いていても、自由に人形遊びをさせるわけではない。数組の親子の前に小さい人形用の浴槽と人形が1セットずつ置かれ、沐浴のさせ方を教師が一斉指導の形で指導していた。また、保育園クラスの活動は、ちょうど訪問した日の前日（2008年9月25日午後9時10分（日本時間同10時10分））に有人宇宙船「神舟7号」が酒泉衛星センターから発射されたという報道を元に、その宇宙船の画像を画面上にうつし、それを模写させるという活動であった。わが国でよく見られるような運動会や遠足の時の楽しかった思い出を絵に描く、という活動とはずいぶん異なる、写実的な模写活動である。

写真14　親子活動の様子

写真15　ロケットの模写



幼児たちは、豊富な教材とスタッフ、恵まれた環境と設備の中で、次々と学習スケジュールをこなしていっていた。しつらえられた教育の観はぬぐえないが、幼児の興味をひきながら、非常にシステマティックに早期開発を行っていっている大都市の富裕層の教育が窺えるといってよいだろう。

＊本稿は、両者の協議を踏まえ、『全域性教育园本课程理念与操作』の翻訳を遠藤が、その他の執筆と楽譜を山中が担当した。

謝辞：　筆者らは、2008年度上半期の「高知大学国際交流基金」助成事業による職員の海外派遣事業により、2008年９月24日－27日の旅程で天津師範大学を訪問した一行（遠藤隆俊、菊地るみ子、山中文）である。この参観は、その時に天津師範大学側が設定してくださったものである。

天津師範大学の高玉葆校長、天津師範大学教育学院の刘智萍先生ならびに天津師範大学関係者のみなさま、そして华夏未来幼儿教育集团董事長赵骞氏はじめ応対してくださった先生方に感謝申し上げます。また、本研究において、同行した高知大学教育学部菊地るみ子先生に写真のご提供、ご指導ご助言をいただきました。深く感謝申し上げます。

1　教学担当者らの給与にしても、決して低いわけではない。農村部の幼児教師の2005年当時の給与230元（田輝「中国におけるECCEの政策的研究－より多くの子どもに教育を受ける権利を保障するために」、チャイルド・リサーチ・ネット、http://www/crn.or.jp/LIBRARY/CIR/0006.HTM、2008年10月20日アクセス）のおよそ10倍である。

2　中国・天津华夏未来幼儿教育集团の宣伝パンフレットp.24

3　唐澤真弓、林安希子ら「幼児教育の文化的意味　－日本、アメリカ、中国における文化間および文化内比較－」、『発達研究』第20巻、発達科学研究教育センター、2006年、pp.33-42

4　『全域性教育园本课程理念与操作』（主編　马丽莉、新蕾出版社（天津市）、2006年）の芸術領域課程の「第三節　音楽教育課程の理解」部分の翻訳である。（pp.279－282）

5　文部科学省『幼稚園教育要領解説』、2008年、p.139

6　同上p.141

7　同上

8　同上

9　文部科学省『小学校学習指導要領解説』2008年、p.23

10　数字譜から五線譜への変換は、山中が行った。なお、付けている歌詞は、遠藤が訳したものである。詞全体の訳であって、旋律に沿った日本語歌詞ではないことをお断りしておく。

11　『全域性教育园本课程理念与操作』（主編　马丽莉、新蕾出版社（天津市）、2006年）の芸術領域課程の「第四節　音楽教育課程の実際の運用」部分の翻訳である。（pp.282－288）

12　スズキメソードは、元々、鈴木慎一が考案した音楽教育法である。「どの子も育つ」ということばに代表される才能教育の理念と方法が幼児教育現場で受け入れられるようになった。全国各地の幼稚園で、鈴木自身も「スズキメソード幼児学園」を創設している。今回訪問した天津師範大学教育学部幼児教育学科でも、スズキメソードについて質問があるなど、関心の高さを窺わせた。

13　＊は１拍分の拍の長さを表し、＊＊はあわせて１拍の長さである。０は休符を表す。｜は小節線である。

14　楽譜19、20小節目のフォルテ、ピアノの位置は不自然である。19、20小節がフォルテ、21, 22小節がピアノの誤植ではないかと思われる。

15　前掲『全域性教育园本课程理念与操作』、pp.134-154に掲載されている。

16　同上p.139

17　同上p.140

18　子どもに正しい手洗い習慣を見につけさせようと、花王株式会社が製作した同社製品花王ビオレuを用いた手洗い歌である。原曲と歌い方は、同社ホームページに掲載されている。（http://bioreu.blogdeco.jp/ 2008年10月25日アクセス）

19　前掲『全域性教育园本课程理念与操作』、pp.167-210に掲載されている。

20　同上p.167-171

21　たとえば、『子どもの歌を語る－唱歌と童謡』（山住正己、岩波新書）などに詳しい。

22　この点については、拙稿「中国・天津市の小学校音楽授業分析」『高知大学教育学部研究報告』第68号、p.15-22、2008年で述べた。

23　たとえば、拙稿「音楽科のグループ学習における「協同学習」観の検討」『音楽学習学会学会誌』第２巻、pp.25-32、2006年を参照されたい。